Zoomのブレイクアウトルームを活用した漢文学講義・演習

Chinese Literature Lectures and Exercises Using Zoom's Breakout Room

好川　聡
YOSHIKAWA Satoshi

１．はじめに

２０２０年度は新型コロナウイスル拡大防止のため、どの大学でもオンライン講義の対応を余儀なくされた。オンライン講義の手法は、大きく分けて、オンデマンド型と同時双方向型があるが、いずれの形式を選択にするにせよ、私個人が最も懸念したのは学生同士の意見交流の機会が失われることである。対面型の講義であれば、授業前に友人たちと課題について確認しあったり、授業中に聞き逃したところや分からなくなったところを隣に聞いたり、授業後に講義の感想を言い合ったりする。こうした何気ない会話は学生の不安や疑問を解消するために一定の役割を果たしているものの、オンライン形式となって一人で講義を受けることになれば、わざわざ SNS などで尋ねたりするほどのことではなく、その結果学生に細かなストレスが蓄積されていくことになる。さる座談会の中でも、オンラインの授業内容の理解度はそれほど悪くないものの、特に学生が不満を感じているのは、教員と学生との対話の機会や学生同士のコミュニケーションの機会がほとんど確保されていないところにあるようだと指摘されている[1]。こうした学生の不満、要求に対して工夫できるところは少ない。実際、岐阜大学の令和２年度前学期授業評価（オンライン授業）の集計結果でも、各項目の学部平均は、

	（－）	（＋）
教材のわかりやすさ	１１．５％	４６．８％
課題の内容・量	１９．３％	４３．６％
課題に対するフィードバック	１０．６％	３３．９％
勉強のペースづくり	６．４％	２９．９％
先生への質問・回答	４．２％	２８．９％
受講生間の意見交流	９．４％	１９．２％
特になし	４８．８％	８．４％

※（－）は「あまりよくなかった・もう少し授業の工夫があれば」と思う、（＋）は「よかった・工夫されていた」と思う

となり、９割以上の学生がなにかしらの教員の工夫や努力を感じ取っているものの、その中で「受講生間の意見交流」への評価は２割弱ともっとも低い結果となっている。

また、２０２０年１０月に行われた第３１回中唐文学会大会（Zoom にて開催）でも、シンポジウムの部で「遠隔授業における古典・語学――実践報告と展望」の中で、遠藤星希氏、大山岩根氏、高芝麻子氏、長谷川真史氏による授業実践報告が行われた。毎年学術的な発表が行われていた中で、今回授業実践報告のシンポジウムが初めて企画されたのは、どの大学教員もこれまでに経験したことのない対応を求められ、他の教員の講義への関心が高まっていることを表している。発表は「オンデマンド型授業の準備の流れ」「オンラインで中国語授業を行う上での「制約」、実際の授業運営」「視覚的工夫のしやすさ」「漢詩を作ってみよう」等のテーマで、それぞれがオンライン形式に対応した、あるいはオン

[1]「座談会～新型コロナウイルス感染症対応から見えてきたこれからの大学～」の山崎光悦氏の発言による（大学基準協会『じゅあ６５号』、2020）。

ラインならではの創意工夫を凝らしており、大いに裨益するところがあったが、ただ受講者同士の交流という観点は見られなかった。

緊急事態宣言で大学が休校していた４月中頃、Zoom にブレイクアウトルームという少人数に分けてグループトークできる機能があることを知り、この機能を用いてオンライン講義では欠けがちな学生同士の交流を補えないか考えるようになった。本稿は２０２０年度前期の漢文学概論と漢文学各論Ⅱにおいて、Zoom のブレイクアウトルームを用いてどのように学生間の意見交流を行うべきか模索していった授業実践報告である。ただ、もともと実践報告を行うために企画したものではないこと、また先行研究を踏まえて既存のモデルや理論を用いた実践報告ではないため、通常の実践報告とは異なる形式であることをあらかじめことわっておきたい。また、当初 Zoom にはセキュリティ上に問題があり、たとえば香川大学の新入生向けガイダンスで何者かが不正に侵入して問題になったこともあって、Zoom の使用を控えるよう指示を出した大学もあった。確かに当初はミーティングにパスコードを設定しても、Web 上のマイ設定でパスコードを有効にするよう変更しておかないとパスコード無しで入室できるという不備などがあったが現在では改善されており、ワンクリックで参加できるよう招待リンクにパスコードを埋め込む機能も追加され、事前にアドレスを知っていなければ侵入される危険性はかなり軽減された。待合室や共有機能の制限なども使えば、少なくとも大学講義レベルでは十分なセキュリティ機能をもっているといえるだろう。また一方、オンライン講義で Zoom と並んで使用される Microsoft Teams も、２０２０年５月当初は、Zoom の同時表示人数は２５人、設定で４９人に増やすこともできたのに対して、Teams は４人しか同時表示できない上にブレイクアウトルームの機能もなく、多人数での同時双方向型の講義には向いていなかった。しかし、その後のバージョンアップで９名→４９名と表示人数が増え、１２月にはブレイクアウトルームの一般提供が開始され、Zoom と遜色ない機能を持つようになった。我々教員はこうしたソフトウェアの改善に常に眼を光らせてその時々に応じた最善の授業形態を模索する必要があると同時に、大学上層部の方でも当初立てた方針に固執せずに柔軟に対応していくことが求められるだろう。

２．漢文学各論Ⅱの実践報告

漢文学各論Ⅱは３年生を対象とした『文選』の詩を読む講義で、例年であれば中華書局『文選』のコピー（句読点のみ）を配布して学生に書き下しと訳を予習させ、講義では訓読文をホワイトボードに板書して発表してもらい、その発表を元に他の学生の意見を募る伝統的な講読形式をとっていた。１６句前後の詩を選び、２週で一首のペースで読み進めていく。Zoom で講義を行うに際しても、この形式は踏襲しつつ、以下のような流れを付け加えた。

・学生に講義の二日前に予習したノートを撮影して AIMS（岐阜大学の学習支援システム）を通じて提出させる。
・講義の翌日にはこちらから講義の内容をまとめたものを PDF で AIMS 上にアップロードする。

学生には訳本やネット上の訳などをそのまま書き写したりしないよう、辞書を引いて自分の頭で考えることが大切で、書き下しや訳が間違っていても減点の対象としないことを伝えている。講義後に授業の内容をアップロードするのは、オンライン講義で講義中に回線が飛んだり聞き逃したりしたところをわざわざ先生や友人に尋ねるのは、対面の時と比べて躊躇われると思っての措置である。また、講義はパワーポイントを板書がわりに用い、加えて小型のホワイトボードも用意して訓点などテキストデータでは対応できない際に使用した。ホワイトボードを用いたのは、画面を切り替えて下手な文字や絵を見せるのは学生の気分転換にもなると思ってのことだが、後述の漢文学概論ではとても見やすかったという感想もあり、画面越しの反応も概ね良好であった。

最初に読む詩は「古詩十九首」其一を選んだ。高校漢文の教科書にも多く採られていて、分かりやすい詩でありながら解釈が分かれる箇所もあり、グループトークのやりやすい詩といえる。離れ離れになった夫婦の悲哀を詠う詩だが、全文は以下の通り。書き下しは一例に過ぎない。

行行重行行、與君生別離　　行き行きて重ねて行き行く、君と生きながら別離す
相去萬餘里、各在天一涯　　相い去ること万余里、各おの天の一涯に在り
道路阻且長、會面安可知　　道路　阻しく且つ長し、会面　安くんぞ知るべけん
胡馬依北風、越鳥巣南枝　　胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巣くう
相去日已遠、衣帶日已緩　　相去ること日に已(もっ)て遠く、衣帯　日に已て緩し
浮雲蔽白日、遊子不顧反　　浮雲　白日を蔽い、遊子　反るを顧みず
思君令人老、歳月忽已晩　　君を思えば人をして老いしむ、歳月　忽ち已て晩れぬ
棄捐勿復道、努力加餐飯　　棄捐して復た道うこと勿かれ、努力して餐飯を加えよ

漢文学各論Ⅱの受講者は国語教育２０名、特別支援４名、留学生１名の計２５名。前半八句を読む講義では、まず学生に二句ずつ発表させて書き下しと訳を簡単に確認していった後、４名前後の６グループに分け、以下の議題をパワーポイントに表示して７～８分ほどのグループディスカッションを行わせた。

・１句目「行行重行行」の主体は誰か？
・２句目「君」とは誰を指すか？
・３句目「相」は、どういうニュアンスを持つ助字か？
・７、８句目「胡馬依北風、越鳥巣南枝」はどういうことを言いたいのか？

「行行重行行」の主体は夫で動かないが、２句目の「君」は作中の歌い手が夫とするか妻とするかで変わってくる。そうした意見の割れ方を見越しての問題設定である。「相」は必ずしもお互いの意味にはならないという前年度の講義の復習である。最後は馬や鳥ですら故郷を思うのだから、人ならなおさらという常套のレトリック。こちらとしては最初ということもあり、発言のしやすい問題を設定したつもりであったが、ブレイクアウトルーム後の議論では想定よりも発言する学生がおらず、チャットでの発言も促し、ヒントを出しつつ回答を導いていく結果となった。学生もオンライン講義に慣れていなかったこともあるが、対面の講義と比べて場の雰囲気が分からない上にマイクをオンにして発言する必要があり、自主的に発言するのは対面の講義以上の勇気が必要で難しいことを実感した。

また、前半八句をまとめて一回のブレイクアウトルームで行ってしまったため、最初の学生の発表に対して突っ込んだことを確認できないまま、まず八句進むことになってしまった。また、例年の対面式の講義であれば、学生の方からこういった書き下しや訳でも大丈夫なのか声が挙がるが、オンライン講義ではまだ学生が慣れていないこともあって、自主的な発言はほとんど出てこなかった。そこで次回の後半八句を読む講義では、事前に提出した学生のレジュメを色々例に出して総括しながら２句ずつ進み、以下のような問いかけでブレイクアウトルームを計三回実施した。

・11、12 句「浮雲蔽白日、遊子不顧反」の、「浮雲」「白日」はどういうことを言い表そうとしているのか。
・最後の「棄捐勿復道」「努力加餐飯」は、それぞれどういうことをいっているのか。
・この詩の歌い手（詩の作者とは一致しなくてよい）は、誰と考えたらよいか。

最初の問いかけは浮き雲が太陽を覆い隠すように夫が他の女に惑わされて故郷に戻ってこないのではないか、ということだが、これもこちらが想定していた以上に難しかったようで、ブレイクアウトルーム後の問いかけにはなかなか応じず、こちらから補足したり指名したりする形で進んでいった[2]。グループによっては分からないね、で後半は沈黙のまま終わったかもしれず、対面であればそうした場の雰囲気を察してヒントを出したり質問を変えたりして対応していくが、ブレイクアウトルームでは全体の様子を把握することができず、学生に無駄な時間を過ごさせてしまう。この講義ではそうした懸念が浮き彫りにされた。

その次に読んだ魏・曹植の「王粲に贈る」詩では、王粲が曹植に贈ったと思われる「雑詩」を紹介して表現の共通点を見つけてもらう、という形でブレイクアウトルームを行ったが、ブレイクアウトルームの使い方を模索している時期でもあった。また、この頃漢文学概論でも Zoom での講義を始めており、そのブレイクアウトルームを通して感じたことは、問題設定タイプのグループトークでは発言のタイミングがつかめず他の人のやりとりを眺めるだけの学生もおり、全員に授業参加の意識を持たせるためには、個々の学生がまずしっかり発言できるような議題を設定すべきであるということである。こうした問題意識のもとで考えついたのはこちらから問題を設定して議論させるのではなく、学生に発表させる前にまずは学生同士で予習してきた内容を話し合えばよいのではないか、ということである。伝統的な大学の講読形式とは異なるが、オンライン講義にはオンラインならではの進め方があってもよいのではないかという思いもあり、こうしたグループディスカッションを西晋・陸機の「招隠詩」の後半の回に試みに行った。山に隠れた隠者を呼び戻すがその山の自然に癒やされるという型の詩で、前の回で前半八句を読み、後半十句は以下のような書き下しである。

激楚佇蘭林、回芳薄秀木　　激楚　蘭林に佇み、回芳　秀木に薄（つ）く
山溜何泠泠、飛泉漱鳴玉　　山溜　何ぞ泠泠たる、飛泉　鳴玉を漱（すす）ぐ
哀音附靈波、頽響赴曾曲　　哀音　霊波に附し、頽響　曾曲に赴く
至樂非有假、安事澆醇樸　　至楽　仮有るに非ず、安くんぞ醇樸を澆（うす）くするを事とせん
富貴苟難圖、税駕從所欲　　富貴は苟（まこと）に図り難し、駕を税（と）きて欲する所に従わん

最初に読んだ「古詩十九首」其一よりも難しい内容で、事前に提出させた予習ノートでも空白の箇所がある学生も何名かいた。講義ではまずブレイクアウトルームを設けてグループごとに後半部最初の四句の自分の訳を発表・意見交換させてから、全体の場で学生に書き下しと訳を発表させる、また最後の六句分についても発表前にブレイクアウトルームを設けて同じ流れで進めていった。ブレイクアウト後の学生の発表は、例えば「哀音附靈波、頽響赴曾曲」は、対句の構造に気付きにくく、また気付いたとしても、「霊」がよい（善）の意、「曾」が「層」と同じで重なる意にまでたどり着くのは難しい句である。学生が提出した例では、「哀音　霊波を附け、頽響　曾ち曲に赴く」「哀音　霊に附いて波だつ、頽響　曾ち赴き曲がる」など文法的に読めない書き下しや、「曾」を「會」（会の旧字体）と勘違いしたものが少なからずあったが、「哀音　靈波に附き、響を頽し曲に会し赴く」と書いていた学生を指名したところ、「哀音　霊波に附し、頽響　曾曲に赴く」としっかり対句に直して発表していた。また、最後の「富貴苟難圖」についても、「富貴　苟くも図を難くんば」「富貴　苟くも難図し」「富貴　苟くも難を図らば」など、「図り難し」という「難」の基本的な用法が読めない学生が多くいたが、「富貴苟くも難しきを図れば」と準備してきた学生を指名したところ、「富貴　苟くも図り難ければ」と修正して発表していた。「曾」や「苟」をどう読むかは文脈を踏まえた難しい問題だが、明らかに文法的に

[2] あとの２つの質問の解釈の多様性については、拙論「漢文教育の中の漢詩　―解釈の多様性について」を参照（岐阜大学教育学部研究報告・人文科学、第６７巻第２号、２０１９）。

おかしいところは学生同士の対話で解決している、という一定の成果が得られた。その一方でブレイクアウトルームの後でも自分の訳を貫き通した学生もいたが、そういった例も含めて、他の人の発表を聞いて違っている箇所はどちらが正しいか自分で判断して発表していることが確認された。

この講義の後、次回の課題の提出にあわせて「不安な部分を予めグループで確認してから書き下しや訳を詳しく考える事ができるので今回のような講義方法も個人的に良いなと思います。」というコメントも寄せられ、以降講義の中で２回ブレイクアウトルームを設けて他の人の考えを確認してから発表に臨むという流れが定着した。ブレイクアウト中に各グループを巡回してみたが、単に書き下しと訳を発表するだけでなく、辞書で調べたいくつかの候補の中からその解釈を選んだ理由を説明している学生がいたり、分からない箇所はどう分からなかったのか丁寧に説明する学生もいたりして、おおむね活発な意見交換が行われていた。「全く自信がないのだけど」と言いながら友人に自分の解釈を披露する様子は楽しげでもあり、オンライン講義の中でも学生同士に意見交換させて交流と理解を深める、という目的はある程度達せられたように思う。

３．漢文学概論の実践報告

漢文学概論は２年生を対象とした講義で、例年は漢文教科書でよく取り上げられる有名な古典や詩人をピックアップして時代順に概説していく流れにしている。今年度の最初の３回はオンデマンド形式で課題や感想を提出させる形で行っていたが、４回目の老子・荘子の講義から Zoom に切り替えた。基本的に各古典の特色を概説する講義なので、グループトーク用の議題を新たに設定する必要があり、その時間の確保のために講義内容を変えたり削ったりすることとなった。まず講義前半の老子では、「道」の概念や老子の逆説的な表現や修辞の工夫を紹介したあと、「□や傍線に入る言葉を考えてみよう」というクイズ形式のようなグループトークを試みに設定した。概論の受講者は国語教育２６名、副免１０名（体育教育１名、特別支援５名、学校教育２名、心理２名）だったが、これをランダムに９グループに分け、６～７分程度の時間をとった。議題は以下の通り。

（第八章）上善は□の若し。□は善く万物を利して争わず、衆人の悪（にく）む所に処る、故に道に幾（ちか）し。（同じ漢字が入る）
（第四十五章）大直若屈、大巧若□、大弁若訥。
　大直は屈するが若く、大巧は____が若く、大弁は訥なるが若し。
（第七十八章）弱の□に勝ち、柔の□に勝つは、天下知らざる莫きも、能く行う莫し。
（第五十六章）知る者は言わず、言う者は知らず。
（第八十一章）信言は美ならず、_____。
　　善なる者は弁ぜず、_____。
　　知る者は博からず、_____。

最初は「上善如水」という日本酒の銘柄にもなっている有名な句で、その続きの内容から類推してみる問いである。次は逆説的な表現で「屈（くつ）」「訥（とつ）」と韻を踏む中で「巧」の対義語「拙（せつ、つたなき）」を考え出す問い、次も「弱」「柔」の対義語を考える問いで「柔よく剛を制す」の語源となった有名な言葉。第八十一章の傍線は手前の「知る者は言わず、言う者は知らず」のレトリックを参考に「美言は信ならず」「弁ずる者は善からず」「博き者は知らず」を導き出す問いである。学生同士で考えて老子に特徴的な表現を穴埋めさせることで、老子の言い回しにより親しんでもらおうという意図である。韻を踏むことや、第五十六章の表現から考えるようヒントもある程度与えた上でグループディスカッションをさせたが、こちらが想定したよりも反応が悪く、最後の問いまで議論できなかったグループもおり、あらためて全体で考えさせていく流れになった。講義の感想も、「老子は逆説表

現であらわしているものがおおいので、穴埋め形式にしてどんな文字が入るか予想することができるのが面白かった」という学生がいる一方で、「今回老子の空欄を埋める為に話し合いをしましたが、最初からつまずいてしまいました」と述べる学生もおり、各論Ⅱの「古詩十九首」其一のブレイクアウトルームの時と同じような問題設定の難しさを感じた。

講義後半の荘子の概説でのブレイクアウトルームは、講義の最後に以下の応帝王篇の有名な話をもとに行った。

南海の帝を儵（しゅく）と為し、北海の帝を忽（こつ）と為し、中央の帝を渾沌（こんとん）と為す。儵と忽と時に相い与に渾沌の地に遇い、渾沌　之を待すること甚だ善し。儵と忽と渾沌の徳に報いんことを謀りて曰く、人皆な七つの竅（あな）有りて、以て視聴き食らい息するに、此れ独り有ること無し、嘗試（こころ）みに之を鑿（うが）たん。日に一つの竅を鑿つ。七日にして渾沌死す。

「儵」と「忽」という名前は「儵忽」と繋げると時間の短いことを意味し、人間の営みを象徴している。この話で何故渾沌は死んでしまったのか、と問いかけて新たにランダムにグループを組み直して５～６分程度の時間を設定した。明確な答えのない難しい問題で、当初は余った時間でブレイクアウトルームに慣れさせるための雑談程度を意図したもので、ブレイクアウトルーム後もこちらから意見を出さずに講義を終えたが、難しい問いかけであったにもかかわらず、講義の感想ではこちらの想定以上に渾沌が何故死んでしまったのか、多くの面白い意見が寄せられた。自分自身の考えを記す学生が当然多かったが、中には、

・ものすごくグロテスクでサイコパスなお話かと思った。けれど、ブレイクシンキングの際に、友人が七つの穴が開いたことによってもうそれは渾沌ではなくなった。渾沌という概念が死んだのだということを聞いたことがあると話していて、とても納得・感心させられた。
・「渾沌は渾沌として存在しているのに無理やり一定の規則に従わせようとしたから死んでしまった」「渾沌に七つの竅ができたことで五感から多くの情報（悩みなど）が流れ込み、耐えきれなくなって死んだ」という意見が出ました。私は渾沌について知識が無かったのですがどちらも大いに納得できると思いました。その上で、私は前者の理由が有力だと考えます。……
・「混沌」が死んだ理由について、グループで話し合った結果、「儵」と「忽」はどちらも短い時間を表すため、「混沌」が七つの穴を開けられ時を感じることができるようになってしまったため死んだ、という結論に至りました。

など、他の学生の意見に納得・感心したり、グループ内で話し合った結論を書いてきたりした学生もいた。最後の例に挙げた学生は、授業後に別の理由はないのかと気になって調べた内容も書き加えており、グループディスカッションによって学習意欲がさらに湧いたことがうかがえる。例年でも感想カードを提出させていたが、授業後に学生同士で話し合って刺激を受けたといった内容はなかった。オンライン講義を余儀なくされ、ブレイクアウトルームを活用したからこその成果だといえよう。

また、学生にとってはブレイクアウトルームという体験が新鮮だったようで、ブレイクアウトルーム自体の感想も何名かから寄せられた。「今まで、ZOOM のグループディスカッションを使ったことが無かったので、意見を他の学生たちと交換するのがとても面白かったです」、「また、今回初めてブレイクアウトルームというものを体験しました。オンライン授業は受け身になってしまいがちですが、このような機能や時間があると考えがアウトプットできていいなと思いました。久しぶりに大学の仲間の顔を見ることができたのも嬉しかったです」、「他の授業ではやったことがなくて初めてだったので少し戸惑いましたが、久しぶりに声を聴くことができたので良かったと思いました」といった感想や、

他の講義ですでに経験している学生からは、ホストが自由にブレイクアウトルームを覗いて見てまわれることを教えてもらい、次回以降の講義に生かすことができた。

この回は学生の反響にこちらも刺激を受けたが、次回以降は渾沌の話のような学生が自由に意見できるような課題設定が難しく、ブレイクアウトルームの議題に苦心した。陶淵明の講義では「挽歌詩」を読ませて「どんな人を悼んだ歌か？」(自分の死を想定)、「死んだ者は何を恨めしく思っているのか？」（お酒が十分に飲めなかったこと）などを話し合わせたりもしたが、単に中休みとしてブレイクアウトルームを使用した回もあった。また、難しめの課題を設定したときに各グループを巡回していると巡回の後半では沈黙したままのグループもあり、全てのグループでブレイクアウトルームがうまく機能していたわけではなかった。

前期後半、李白・杜甫・白居易の各回では例年代表作を学生に事前に予習させて発表させる講読形式を１時間程度行っていたため、Zoom 講義でも各論Ⅱで用いた全体の場で発表させる前にブレイクアウトルームで事前に確認させる手法を取り入れた。杜甫で予習させた「春望」などは誰もが習っている有名な詩なので、書き下しと訳がみな同じになってディスカッションにならないのではないかという懸念もあったが、各論Ⅱと同様に間違っていても減点の対象とならないよう通知していたので、皆それぞれ自分の頭で考えて書き下しと訳を提出しており、グループトークでも自分と異なる訳を比較させることができた。こうした事前に予習させる回では、ブレイクアウトルームで各々発言させるグループトークを設けることができたが、概論全体を通しては、各論Ⅱのようにブレイクアウトルームの明確なヴィジョンをたてられないまま講義を終えることとなり、多くの課題を残す結果となった。

また、グループの分け方については、Zoom 二回目の講義の感想の中で「グループディスカッションはとても有意義ではあるとは思います。しかし、私は副免許でこの授業をとっているため、グループが作られるといつも国語科３人と私というメンバーになります。私の積極性の問題もありますが、やはり友達同士３人と全く接点のない１人ではやりづらいと感じる部分がありました。」という意見が寄せられた。Zoom は手動でグループを振り分けることもでき、副免希望者でまとめることもできるが、時間がかかる。講義中にそれを行うと学生を無駄に待たせる時間が増えてしまうため対処に悩んだが、授業開始前にあらかじめグループ分けを行ってから講義を始める、という方法を思いつき、意見が寄せられてから次々回の講義で実行に移した。特別支援５名、その他の副免５名で２グループに、国語科の学生は基本出席番号順に６グループに分け、授業開始１０分前から入室してきた学生をブレイクアウトルームの所定の場所に放り込んでおき、授業開始までそのグループ内で待機させるという流れにした。ちょうど授業開始前に教室で学生が席についていき、始まるまで周囲の学生と雑談するような光景をオンライン講義でも再現できないかという目論みもあった。ブレイクアウトルームを解散して講義を開始するときには雑談を続けている学生がいることもあったので、オンライン講義の学生のストレスを軽減させる一定の効果はあったように思う。

その後さらに別の副免の学生から、国語科の〇〇が知り合いなのでそのグループに移してもらえるとありがたい、という申し出を受けて固定のグループを組み直し、最終的には４～６名の７グループを事前に組む流れになった。こうしたグループの組み方に対する学生の感想については次章で触れたい。一方漢文学各論Ⅱの方でも、前述の学生のコメントを見てこちらでもグループ分けで副免をかためる必要性を感じた。国語教育２０名、特別支援４名、留学生１名という内訳だったので、ブレイクアウトルームはまずランダムで６グループ作ったあと、特別支援の学生を手動で一つのグループにまとめる措置をとり、欠席者がいて３名のグループが出来るときには留学生がそこに入らないよう配慮した。特に不満は出なかったので以降この形式で進めることにしたが、あらためて振り返って見ると、たまには従来通りのランダムに組む形式で、国語教育の学生との交流を深めさせてもよかったように思われる。

４．講義の評価と課題

「１．はじめに」でも取り上げた授業評価結果では、漢文学各論Ⅱの方では、「受講生間の意見交流」の（－）評価が０％、（＋）評価が８０％となったが、母体が５人と少なかったので統計資料としては参考にはできない。自由記述覧では一人の学生から「ブレイクアウトセッションで書き下しや訳を確認できたのも、他の人の意見を聞いたり一緒に議論したりしながら考える貴重な機会になったと思います」「色々大変な時期でしたが、漢文学各論は私にとって楽しみな講義の１つでした」という感想をいただいた。また、AIMS で期末レポート提出の際にあわせて「グループディスカッションを使った授業とても分かりやすかったです！話し合いをしながら進められる授業はこの授業しかなく、……」というコメントも寄せられた。

また、漢文学概論の方では、１６名の学生から回答が寄せられ、「受講生間の意見交流」の（－）評価が６．３％（１名）、（＋）評価が５６．３％（９名）となり、学部平均の１９．２％は大きく上回るプラス評価となったものの、まだまだ改善の余地を残す結果となった。自由記述覧の中で、Zoom と教員の反応についての文章を抜粋してみると、

・毎回課題があったことでペースを保ちつつ取り組むことができ、その毎回の課題に対して必ずコメント（しかもしっかり内容を読んだことがわかる内容で）をつけてくださっていたのが嬉しかった。最終レポートの締め切りが意外と短かったので、そこだけはしんどかった。
・はじめはパワーポイントを見るだけだったのですが、途中から zoom で授業をしてくださいました。ホワイトボードを板書代わりにしてくださったり、トークルームを作ってくださりして（原文ママ）、より授業が分かりやすくなりました。友達と画面越しで話ができる唯一の授業だったので、気分転換にもなりました。毎回課題に丁寧にコメントをくださるのも、嬉しかったです。やはり自分だけで画面越しで葛藤するのもいいですが、友達と一緒に協働して勉強するとより深まるなと感じました。
・ブレイクアウトセッションが最期の方はメンバーがずっと固定されていたので、もう少しランダムで組んでもらえたら良かった。
・授業の内容について、受講者同士の小さいグループで交流することができたので良かった。
・途中からだが ZOOM で行うことでほかの生徒との交流ができいろいろ意見を交換することで学びを深めることが出来た。ZOOM はとても良かったため、最初から ZOOM でもよかった。また、ZOOM の時に使用したノートもあったら良かったと思う。
・毎回、課題に対して受け取ったかどうかの反応をしてくださって、安心しました。

というような感想が寄せられた。一部抜粋だが、感想のほとんどは Zoom に関することと、教員の反応についてである。こうした感想を通じて、学生が学生同士の対話、先生の反応に飢えていたことをあらためて実感した。本稿ではブレイクアウトルームに関する実践報告なので課題を確認した後のやりとりについては特に触れなかったが、非対面の講義においては一人一人の学生に対して教員から簡単な反応を返すだけでも学生の不安は随分取り除かれる。大人数の講義ではなかなか難しいものの、可能な限りの対応が求められるだろう。

また、グループの分け方については、副免の希望を取り入れて固定にしたものの、反面、国語教育と思われる学生からは不満の声もあがった。全ての要望に応えることはできないが、ランダムで組む回と固定で組む回を織り交ぜる、漢文学各論Ⅱの時のように副免以外はランダムにするなど、工夫の余地が残される。また、２０２０年９月２１日のアップデートで参加者がブレイクアウトルームを自由に移動できる機能が追加された。その機能を生かして、最初ランダムに組んだ上で例えば特別支援は７番のグループに集まるよう指示を出すなどして、学生にグループ作りをゆだねるようなやり方も考

えられる。グループの組み方は色々考えられるが、より大切なのはブレイクアウトルームで沈黙してしまう学生が出てこないよう、グループトークの課題を工夫することであろう。副免と国語教育の学生が混ざっていても、発言を躊躇ってしまう内気な学生がいても、積極的に発言出来るような雰囲気作り、課題の設定を心がけることが必要だと思われる。

来年度以降漢文学概論を Zoom で行うことになったときの展望としては、例えば、今年度はパワーポイントのオンデマンド形式となった『論語』や『孟子・荀子』の回であれば、事前に『論語』の中で胸に響いた言葉を２、３選んでおいて発表してもらう、とか、性善説と性悪説どちらにより納得するか、などの課題設定が考えられる。また、適当な課題が考えつかない場合は、単に講義の途中と最後に計二回感想や疑問を話し合ってもらうというようなシンプルなものでもかまわないように思われる。先生にいきなり聞くのは躊躇われるようなことをまず学生同士で確認させる機会を設けるだけでも一定の効果はあるであろう。また、対面式にもどった場合でも、今回用いた様々な手法をとりいれて活用していきたい。一般にオンライン講義は対面講義ほどの教育効果は得られないとされ、筆者もその意見に同意するが、オンライン講義の利点、オンライン講義だからこそできることがあることも今回の授業実践を通じて知った。ランダムに４人組んでのグループトークなどはそもそも大学の教室によっては実行できない。将来的には対面式とオンライン形式が融合したような講義が望まれていくのかもしれない。

今回の実践報告は冒頭で触れたように、あらかじめ発表を想定して計画したものではなく、あくまでブレイクアウトルームをどのように学生同士の交流に生かしていくかという試行錯誤の記録である。受講する学生の学力に応じてグループトークのテーマを考える必要もあり、今回のやり方がそのまま流用できるわけもなく、課題も多く残されているが、その課題を共有して今後ブレイクアウトルームを活用していく際の参考になれば幸いである。

なお、Zoom 講義を行うに際して、事前に Zoom の使い方を教授してくださった稲垣裕史氏をはじめとする同学たち、また必要な学生に Wi-Fi 機器を配布するなど Zoom 講義が可能な環境を整えてくださった岐阜大学に対して、この場を借りて深く感謝申し上げる。